

観光供給側面よりみた寺院観光地実態の比較分析

—仏国寺と海印寺施設地区住民を中心として—

金 相 武
 金 鋪 淇*

目 次

I 序 論
1. 研究の意義と目的
2. 研究の対象と方法
II 寺院地域観光の実態
1. 仏国寺地域観光の実態
2. 海印寺地域観光の実態
III 商店街地域調査結果の分析
1. 調査対象集団の特性
2. 観光産業と開発
3. 観光が地域商店街に及ぼす影響
4. 観光開発と地域社会の損益
IV 観光開発が宗教及び寺院管理に及ぼす影響
V 要約と結論
付録（設問紙）

I 序 論

1. 研究の意義と目的

世界観光機構（World Tourism Organization）の統計によれば、1984年度の世界観光客は3億1千930万名にたっし、史上はじめて3億台を突破し、観光の大衆化時代を実感せしめている。同年観光消費額も、無慮1,086億弗となり、前年比4.9%の増をしめした。さらに、1987年度においては3億6千370万名、1,500億弗を記録し、前年比各各6%、11%の増を示し、もっとも有望な産業としてみとめられるようになった¹⁾。とくに、国際観光発展の阻害要因である、各種航空機事故、テロ、一部国家の貨幣価値の下落等にもかかわらず、その持続的な上

昇の趨勢が示されたのは、観光需要の異常な増大とその重要性をものがたるものといえよう。

Sadler と Archer は、観光開発が経済的に社会的に、その地域に及ぼす影響の、肯定的な否定的な要因として、(1)外貨獲得の効果、(2)所得効果、(3)雇用効果、(4)基幹施設の変化、(5)物価変動、(6)経済的依存度、(7)環境の生態学的変動、(8)社会的・心理的变化等が、重要であると主張し²⁾、その特殊性を強調している。

この効果的育成発展によって、このほかにも教育的・文化的効果をも期待することができる。

1) Medlik, R., 'International Tourism: Past, Present, Future', *The Tourism Industry*, 1988/1989, The Tourism Society, London, 1988, p. 7.

2) Sadler, P.G., & B. Archer, 'The Economic Impact of Tourism in Developing Countries', *Annals of Tourism Research*, Vol. III, 1975, p. 20.

* 啓明大学校経営学専攻観光経営学科副教授

** 啓明大学校産業経営研究所特別所員、嶺南大学校名誉教授

〈表1〉 国内及び外来観光推移

年度別	区 分 人 口 (千名)	国内観光延人 員 (千名)	年間1人当観 光回数 (回)	観光参加率 (%)	外来観光客 (千名)	成 長 率 (%)
1984	40,578	131,033	3.23	67.2	1,297	8.6
1985	41,210	153,190	3.72	—	1,426	9.9
1986	41,569	202,191	4.86	—	1,660	16.4
1987	42,082	212,730	5.06	—	1,875	12.9
1988	42,593	238,450	5.60	69.0	2,340	24.9

資料：交通部・韓国観光公社

〈表2〉 民間消費支出と観光関連経費支出比較

区 分	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987
国民総生産 (兆ウォン)	45.1	50.7	59.0	66.4	72.8	83.8	97.5
1人当GNP (千ウォン)	1,171	1,297	1,485	1,648	1,782	2,025	2,324
民間消費支出 (A) (10億ウォン)	30,498	34,001	37,282	40,778	44,126	47,474	52,103
教育・文化・娯楽費 (B) (10億ウォン)	2,473	3,035	3,513	3,913	4,250	4,860	5,414
B/A (%)	8.1	8.9	9.4	9.6	9.6	10.2	10.4

資料：韓国銀行

国民観光は、伝統文化遺産に対する民族的矜持、麗しい祖国の再発見、地域住民との接触による相互理解の促進等により、国民和合に寄与するであろう。また、健全な観光活動は、健康の増進ならびに再生産意欲の鼓吹等にも大きく貢献している。のみならず、観光産業は国土開発の一環として観光地を開発する以外、直接に自然を損傷することが殆んどなく、無公害産業として企業と従業員の所得増大に寄与し、また、観光消費に対する各種税金賦課により財政収入を増大せしめ、これらの側面より、その政策的重要性が強調されている³⁾。

1988年度韓国を訪問した外来観光客数は、23万名に達し前年比24.9%の伸張率を示し、その外貨収入も32万億弗、前年(23億弗)比42.0%増の高い成長率を記録した。また、内国人観光客は1988年度に約2億4千万名に達し(表1)、80年代において年平均14.1%の高い伸張率をあらわしている⁴⁾。一方、(表2)において、民

間消費支出中観光関連部門とみられる教育・文化・娯楽費の比率が、1981年8.1%より、1987年には10.4%と上昇し、国民の関心の高まりをものがたっている⁵⁾。

このように、過去10年間の国民観光増加率(14.1%)は、外来観光客増加率(9.3%)を上回り、GNP成長率(8.3%)をも大きく上回っている。これは、観光事業が国民福祉の次元において重要視されねばならず、とくに、観光供給の側面より、より効果的な国民観光地開発の必要性を示唆している。そこで、急増する観光量にこたえるため、国民観光の性向を調査分析した結果、1980年度は45.5%、1984年度は41.4%が、自然・文化を含む史蹟・名所を旅行目的としていることが明らかとなり⁶⁾、史蹟・名勝地が観光目的地として誘引度が高いものとみとめられるようになった。

ところが、史蹟・名勝観光地にかかわる研究は、ほとんどみるべきものがなく、ただ、1987

3) 交通部・韓国観光公社、『観光動向에 関한 年次報告書』1984, p. 23.

4) 柳文基, 「여행자유화와 항공기 예약난의 관계 고찰」 『觀協』 韓国觀光協會, 1989. 3, p. 5.

5) 交通部・韓国観光公社、『観光動向에 関한 年次報告書』1988, p. 46.

6) 交通部・韓国観光公社、『観光動向에 関한 年次報告書』1985, pp. 80~81.

〈表3〉 設問紙配布及び回収現況

区 分	業 所 名	対象業所数	応 答 数	回収率 (%)
仏国寺地域	宿 泊 業	40	36	90.0
	食 飲 料 業	30	25	83.3
	記 念 品 業	43	37	86.0
	小 計	113	98	86.7
海印寺地域	宿 泊 業	30	23	76.6
	食 飲 料 業	57	38	66.7
	記 念 品 業	18	14	77.7
	小 計	105	75	71.4
総 計		218	173	79.4

年度における韓国観光公社の、済州道、慶州市・束草市等最近大規模に観光開発事業が行われた地域住民1,200名を対象に、その経済的・社会的・文化的実態ならびに環境に及ぼす影響を分析した調査が、1987年5月14日より6月1日までの3週間にわたり、実施された例があるにすぎない。

そこで、本研究は、史蹟及び名勝地第1号に指定されている慶州仏国寺と、第5号に指定されている伽倻山海印寺を対象に、

- 1) 両寺院地域の観光概要の実態を究明し、
- 2) 寺院中心観光が地域住民に及ぼす影響を分析し、
- 3) 観光効果面より実質的な便益と損失を検出し、
- 4) 観光開発の阻害要因と問題点を分析し、
- 5) その対策及び改善方策等を提示して、寺院を中心とする史蹟・名勝地の観光開発及び振興政策に必要な資料を提供することを、その意義としたその目的とする。

2. 研究の対象と方法

本研究の対象は、上記の仏国寺・海印寺地域を研究の範囲とし、その寺院観光現象を含む施設地域商店街及び住民を、研究の対象として設定する。とくに、観光が地域の商店街ならびに住民と寺院に及ぼす影響を究明し、観光供給側面より観光開発が地域社会諸分野に及ぼす便益と損失を分析するために、観光施設業所218個所を調査対象とし、必要な資料の情報を抽出し

た。

研究方法は、従来の形式的で偏見におちいりやすい方法より脱皮して、より合理的で、具体的な資料をうるために、原因叙述式応答要求に比重を重くした設問紙調査法と、直接面接及び観察による調査を実施した。そのほか必要とみとめる資料と参考事項は、関係当局の協調による関連調査研究文献も多数参照した。

設問紙調査期間は、1986年9月1日より12月31日までであり、面接・観察による現場資料収集は1987年1月1日より8月31日までの間に実施した。

設問紙の配付と回収は、全業所を直接訪問し、代表者に自己記入法(self-administrative method)を原則とし、ときにより調査者が代理記入しうるようにし、その便宜をはかるとともに資料収集の充実を期した。回収された設問紙は173部、回収率29.4%である(表3)。設問紙は19項目にわたり付録添付のように作成されたものを使用した。収集された資料は効果的に分析し、相関関係等を統計学的に比較検討するために、原資料をコンピューター(IBM 4331-4MB)に入力し、SAS(statistical analysis system)パッケージを利用した。

II 寺院地域観光の実態

韓国の主な観光目的である仏教文化母体の寺院は、観光動機誘発要因として、観光資源的要素として、また観光施設及び観光商品創出の源

〈表4〉 両寺院別観光客及び入場料収入現況

単位：千名，千ウォン

年 度	仏 国 寺		海 印 寺	
	観 光 客	入場料収入	観 光 客	入場料収入
1981	1,627	464,400	448	74,753
1982	1,803	742,164	617	101,270
1983	1,747	721,440	694	185,440
1984	1,707	720,726	1,154	417,557
1985	1,849	780,681	818	227,867
1986	1,885	1,016,484	795	264,776
1987	1,934	1,450,823	746	245,326

資料：慶州市観光課，伽倻山国立公園管理事務所。

泉として、その発展の礎石となっている⁷⁾。1984年度全国民旅行動態調査報告書によれば全体の41.4%が自然と名所見物，25.9%が避暑と休養，13.4%が疲労回復と緊張解消を目的としていることを明らかにしている。自然及び文化的観光資源の中心となっている仏教寺院は，周囲の景観とともに宗教文化的要素がその魅力となり，ほとんどが観光目的地としての機能を果たしている。外来観光客誘致を目的として発行している広報用パンフレットのうち，1977年より1984年間における67.4%（14種）の表紙が，仏国寺と海印寺をふくむ寺院と文化資源及び自然景観を，22.6%が人物と民俗資源に関するものであったことがしめされているが⁸⁾，これはその寺院の重要性をものがたっている。

現在，韓国では大小約2,000余の寺院があり，そのうち254寺院が国・道（訳注，県に該当）立公園に指定された観光地及び観光慰楽地区内に位置し，主な観光誘引要因となっている⁹⁾。国が指定した5個の史蹟及び名勝地のうち，国

立公園内に位置している名寺院である仏国寺と海印寺は，1987年に総268万名に及ぶ観光客を誘致し，韓国における代表的寺院観光目的地としての重要性を裏書きしている。

1. 仏国寺地域観光の実態

仏国寺は自然景観の秀麗な吐含山を背景に，自然とよく調和された寺院の建築形態と国宝級文化財（6点），なお芸術的に高く評価されている彫刻・壁画等の仏教文化遺産をうけつぎ，かぎりない美と神秘を蔵している。

1987年度において，仏国寺境内を訪れた観光客数は193万4千名にたっし，14億5千82万3千ウォンの入場料実績をあげ，おのおの前年比2.6%，42.7%増をしめている（表4）。

入場料収入において，1981年度が前年度より減少しているが，これは学生団体が一般よりも多かったためであり，1982年度が急激にふえているのは，同年より入場料400ウォンを600ウォンに引き上げたからである。

1972年より1976年にわたり，政府の史蹟地開発事業として施行された整備作業により，南北を貫通する道路を起点として，東側に観光関連便宜施設を建設し，主な観光資源である寺院と吐含山を施設地区より分離保護するようにした。観光施設としては，現在，宿泊施設40，飲食業所30，記念品商43，合計113をかぞえ，居住地域には記念品商業者・飲食業者の住民が生活している。

2. 海印寺地域観光の実態

7) Kim, S.M., "The Role of Buddhism in the Development of Tourism in Korea", MSC Dissertation, University of Surrey, 1983, pp. 193~195.

8) Kim, S. M., "A Comparative Study of Pulguk-sa and Haein-sa Temples as Tourist Destinations in Korea", Ph. D Dissertation, University of Surrey, 1989, p. 136.

9) 金相武，「寺刹，訪問 観光客 実態 및 比較分析」，『経営経済』，第22集，啓明大産業経営研究所，1989，pp.108~109.

〈表5〉 応答者の年齢分布

年 令	仏国寺地域		海印寺地域	
	応答者数 (名)	構成比 (%)	応答者数 (名)	構成比 (%)
20～29歳	18	18.4	28	37.3
30～39	25	25.5	15	20.1
40～49	35	35.7	24	32.0
50～59	20	20.4	8	10.5
計	98	100.0	75	100.0

海印寺がある主峰の伽倻山は、慶南陝川郡と慶北星州郡にまたがり、海拔1,430mの霊峰であり秀麗雄壮、海東名山の一つに数えられている。1972年10月13日国立公園として指定された。海印寺は、巨大な伽藍のみならず護国の寺院として、そのしめる位置は重要であり、仏教文化及び史蹟観光資源として、誘因の強い魅力的対象としてみとめられている。

海印寺には、国宝中の国宝として世界的にも貴重な文化財である、国宝第32号八万大蔵経版8万1千258枚と、国宝第52号大蔵経板庫があり、なお有名である。史蹟及び名勝第5号に指定されている海印寺一円には、このほかにも国宝第206号海印寺高麗刻板28種2千725板と宝物第128号般若寺元景王師碑が、その境内にある。

1987年度に、海印寺を訪れた観光客は74万6千名であり、これは前年比7.9%の減少である(表4)。なお、1983年度まで、年10%の増加をつづけていたが、1984年をピークとして減少をつづけている。その理由は、近隣に釜谷温泉が開発され急激に発達したため、滞在型観光客が大量にそちらへ流れたのによるものと分析されている。

政府の史蹟及び名勝地開発・再整備計画により、無秩序に散在していた観光施設と商店街も整理されることになり、現在、宿泊業30、飲食業57、記念品業18、計105の業所が設置されている¹⁰⁾。

Ⅲ 商店街地域調査結果の分析

調査対象全業所代表218名に対し、付録に示したような19項にわたり設問を行った結果、173名(仏国寺98名、海印寺75名)の応答(79.4%)をえた(表3)。資料を効果的に分析するため、原資料(raw data)をコンピューターに入力した。その分析結果は次のとおりである。

1. 調査対象集団の特性

仏国寺地域全応答者98名のうち、40～49歳層が35.7%、海印寺地域は20～29歳層が37.7%であり、平均は、仏国寺が41歳、海印寺が37歳である(表5)。仏国寺がやや年長であるのは、その観光地開発と商店街造成がより早めにはじまり多少、より永い歴史があるからであろう。

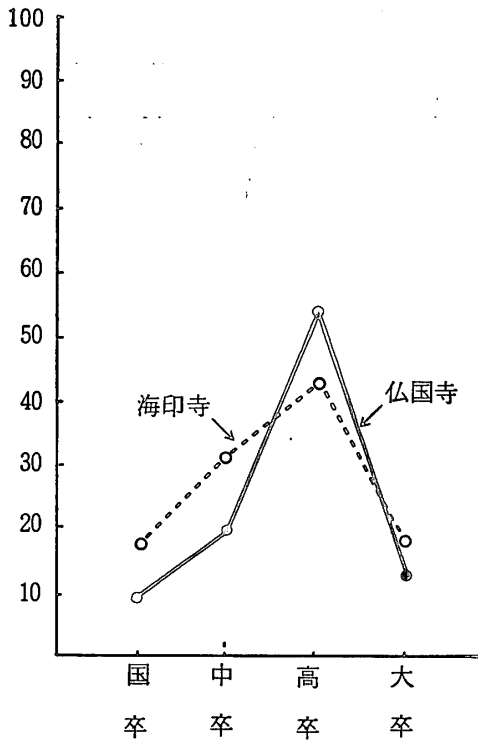
応答者の性別は、仏国寺が男子73%女子27%、海印寺が男子53%女子47%である。海印寺の女子比率が仏国寺より高いのは、女性による食堂等の直接経営が多いためである。

経済生活の水準は、仏国寺が中流層69%、下流層17%、上流層14%、海印寺が中流層77%、下流層20%、上流層3%である。仏国寺が全体的にみてやや高い。ところが、このような現象は、職業満足度との関係において反比例的にあらわれた(図表2)。

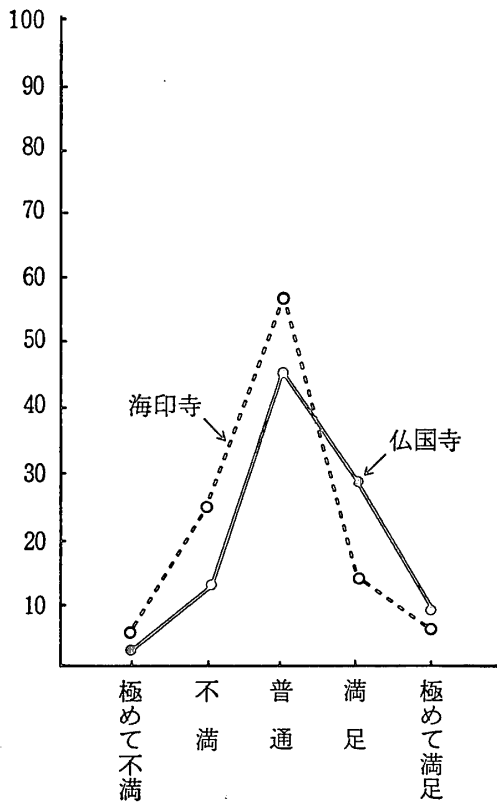
学力水準は、仏国寺が高卒55%、中卒21%、大卒15%、国卒9%、海印寺が高卒43%、中卒31%、大卒13%、国卒13%である(図表1)。平均して仏国寺がやや高い。学力水準は、業所の経営と観光客に対する態度と、おのおの深い関係がある。教育水準が高いほど、観光客の欲求を敏感に把握し適切に対応する専門性が高い

10) 前掲書、pp.100～111.

<図表1> 寺院別教育水準



<図表2> 寺院別職業満足度



ことが明らかになった。

2. 観光産業と開発

職業満足度に対する反応は、仏国寺が海印寺よりやや高くあらわれた。(図表2.)に示されたように、5段階測定値(1~5)¹¹⁾を適用した結果、仏国寺は平均3.28(「普通」よりやや高い)、海印寺は2.87(「普通」よりやや低い)となった。これは、海印寺がやや不満をあらわしていることになる。これらの現象は、(表4)にしめされているように、海印寺の観光客が1985年より減少しているためとおもわれる。とくに、近隣の釜谷温泉が、滞在型客を誘致し海印寺地域の収入が著しく減少し、商店街住民の意欲と士気がおちこんだ。これを克服するためには、伽侖循環道路と展望台の建設、そのほか各種施設の改善がのぞましい。

将来有望な観光事業に対する反応は、仏国寺地域が宿泊業51%、記念品業13%、ケーブルカー12%を示し、海印寺地域が記念品業29%、飲食業28%、ケーブルカー16%の順である(図表3)。

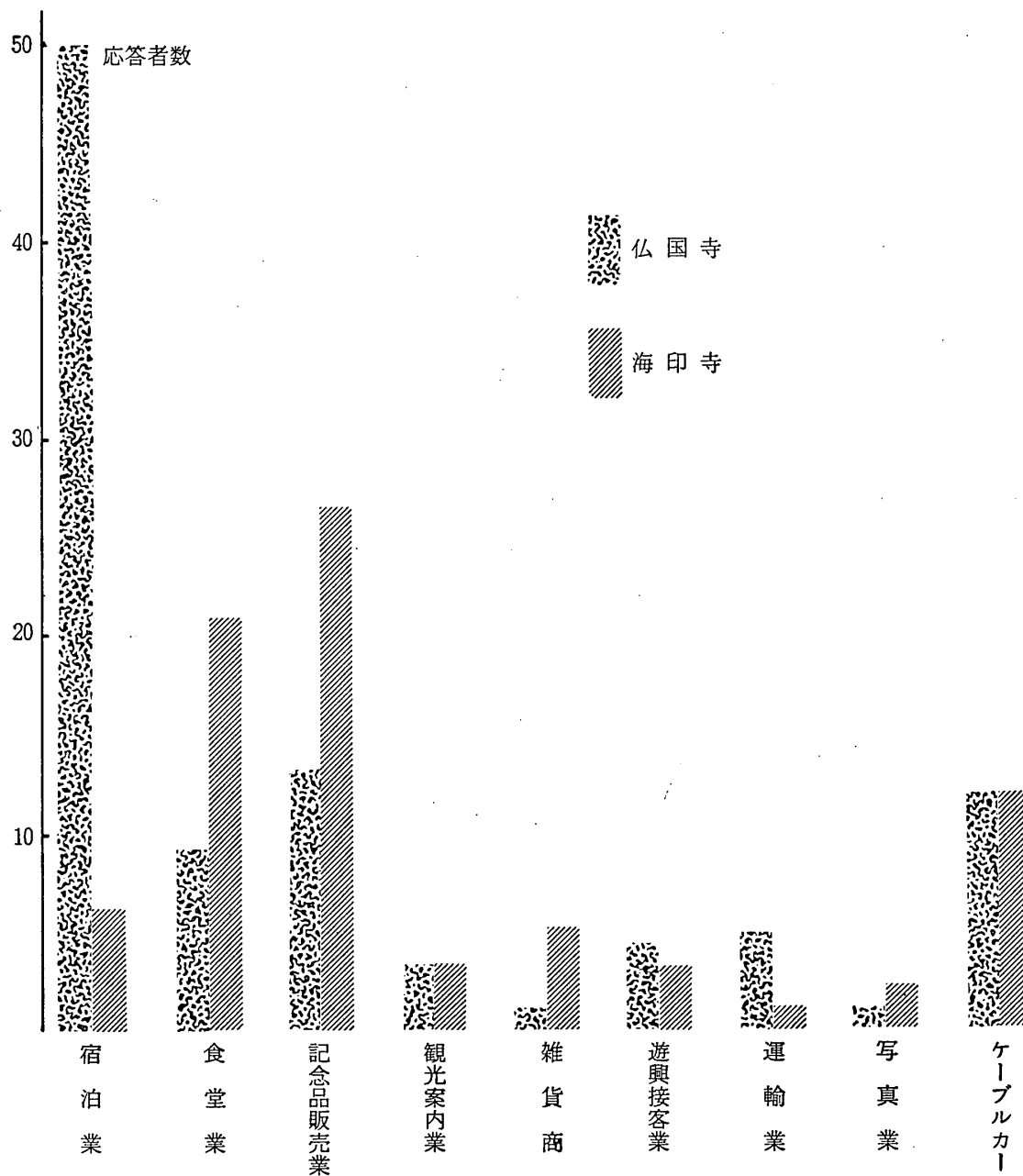
宿泊業において、仏国寺地域が高く海印寺地域が低いのは、前者の客室保有率が高いのみならず、後者の業所敷地が寺院所有であるためとおもわれる。とくに、注目すべき点は、両者ともにケーブルカーを有望としているが、これは、新たなレジャー施設に対する要望とおもわれる。

観光事業の展望において、「(「よい」「すこぶるよい)」が、仏国寺地域は76%、海印寺地域は87%の反応を示している(図表4)。これは、前者が後者より開発面において、すでに相当充実している反面、後者はいまだ開発の余地が多くのおもわれているからだとおもわれる。そこで、後者については開発阻害要因の解消がのぞまれるのであるが、そのうちでも土地所有権に関する問題を、合理的に解決することが重要な課題であるといえよう。

観光客に対する態度は、「(「親切」「すこぶる親切)」が、仏国寺地域78%、海印寺地域52%である(表6)。とくに、海印寺地域において、

11) World Tourism Organization, "Evaluating Tourism Resources Madrid", p. 32.

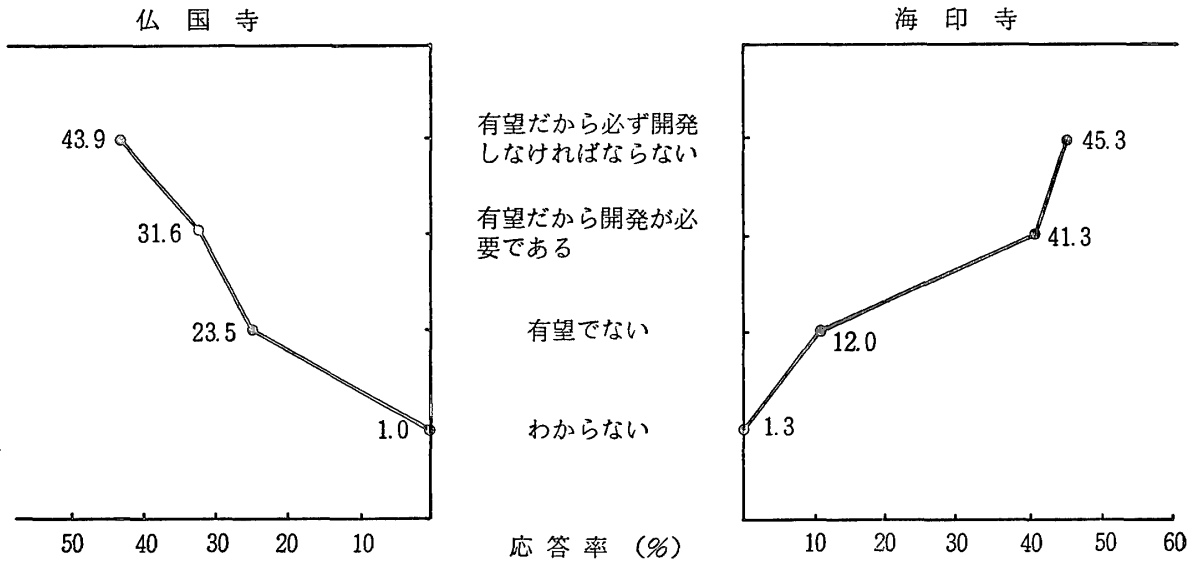
<図表3> 寺院別有望業種



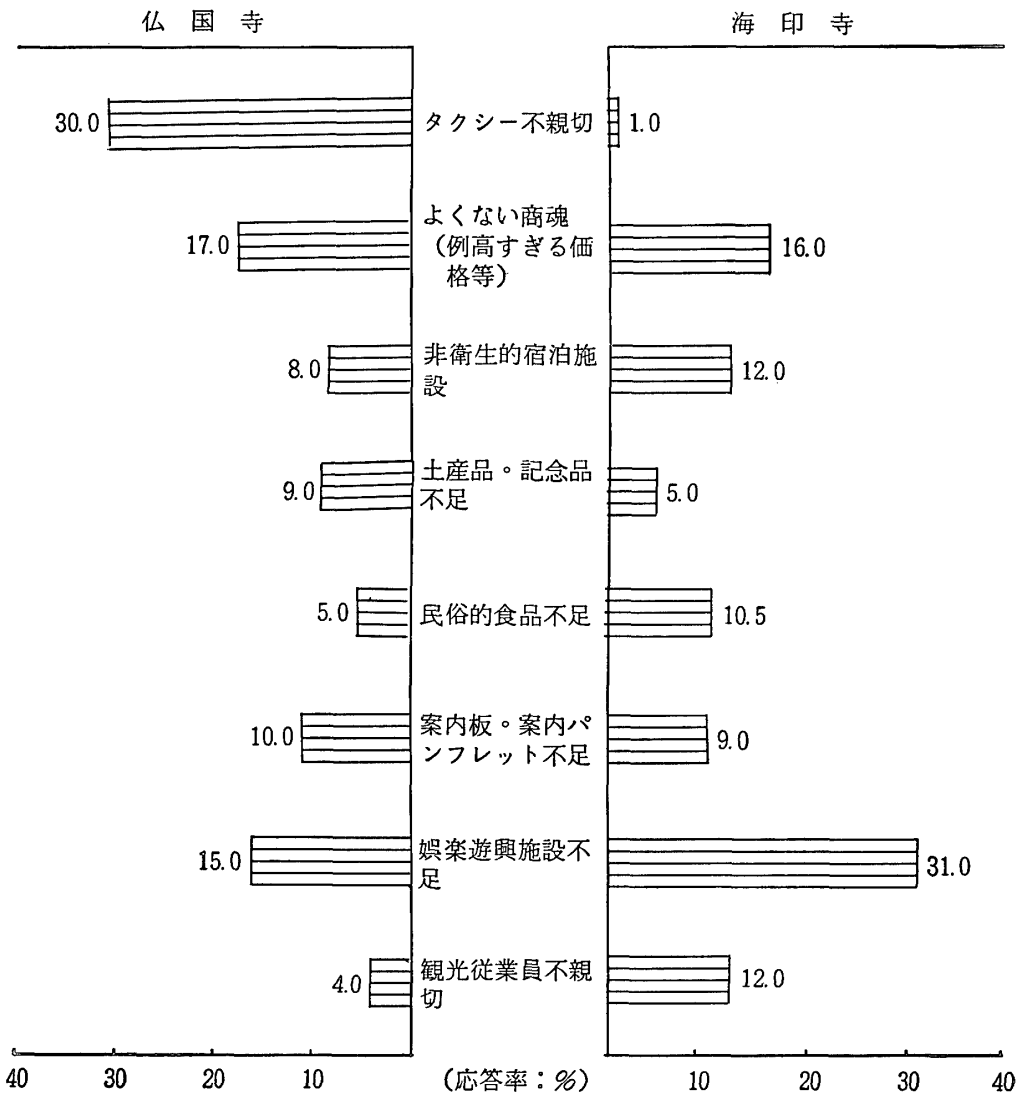
<表6> 寺院別観光客に対する態度

区 分	仏国寺地域		海印寺地域	
	応答者数	構成比 (%)	応答者数	構成比 (%)
頗る親切	22	22.5	15	20.0
親切	54	55.1	24	32.0
普通	20	20.4	21	28.0
不親切	1	1.0	13	17.3
頗る不親切	1	1.0	2	2.7
計	98	100.0	75	100.0

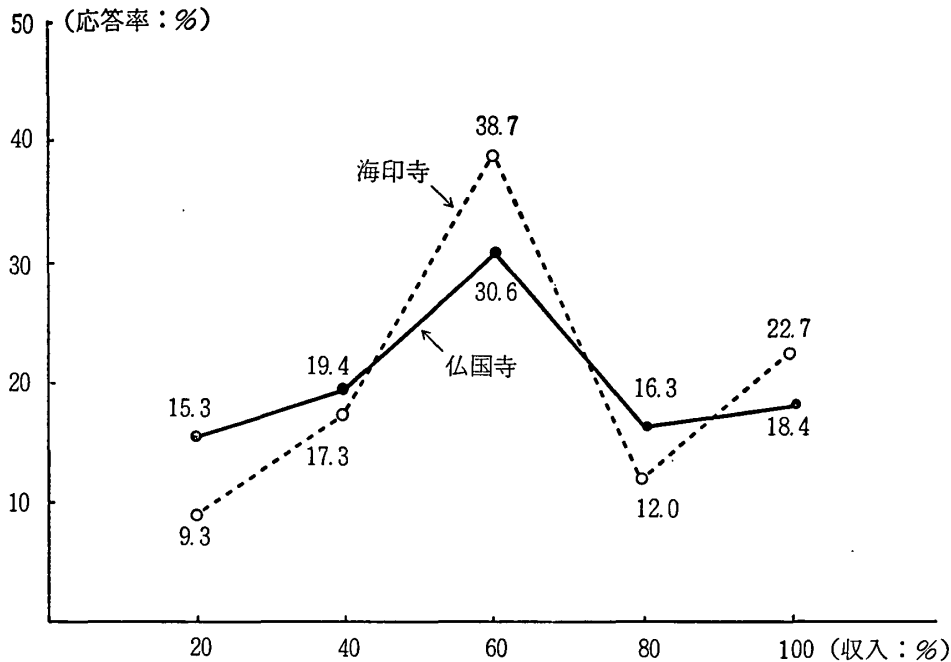
<図表4> 寺院地域別観光産業展望



<図表5> 寺院別観光発展阻害要因



〈図表 6〉 寺院別年間所得中観光収入の依存度



食堂業主はすこぶる否定的反応をしめしたが、これは、観光客の言行と業所従業員のサービス態度との間に、密接な相関関係があることをしめすものである。また、これは士気とも関連し、景気の動向と従業員の態度は正比例する。従って、この改善は、観光客と地域住民の深い理解と正しい倫理感の基礎の上に人間関係が成立することによって、はじめて行われるものとおもわれる。

観光開発の障害要因について、仏国寺地域は、タクシーの横暴30%、よくない商魂(例高すぎる価格等)17%、レージャー施設の不足15%を示し、海印寺地域は、レージャー施設の不足32%、よくない商魂16%、従業員の不親切17%を示している。1987年度韓国観光公社の調査によれば、地域住民の41.4%が、開発過程において自身等の意見を反映していないと¹²⁾指摘しているという。(図表5)に示されているように、観光産業の発展を阻害している要因が、レージャー施設の未開発が、両地域業主の支配的な見解であるのかんがみ、当局は、相互協調のも

とにこれらの開発にむけて、積極的かつ長期的な支援計画をたてねばならないであろう。

3. 観光が地域商店街に及ぼす影響

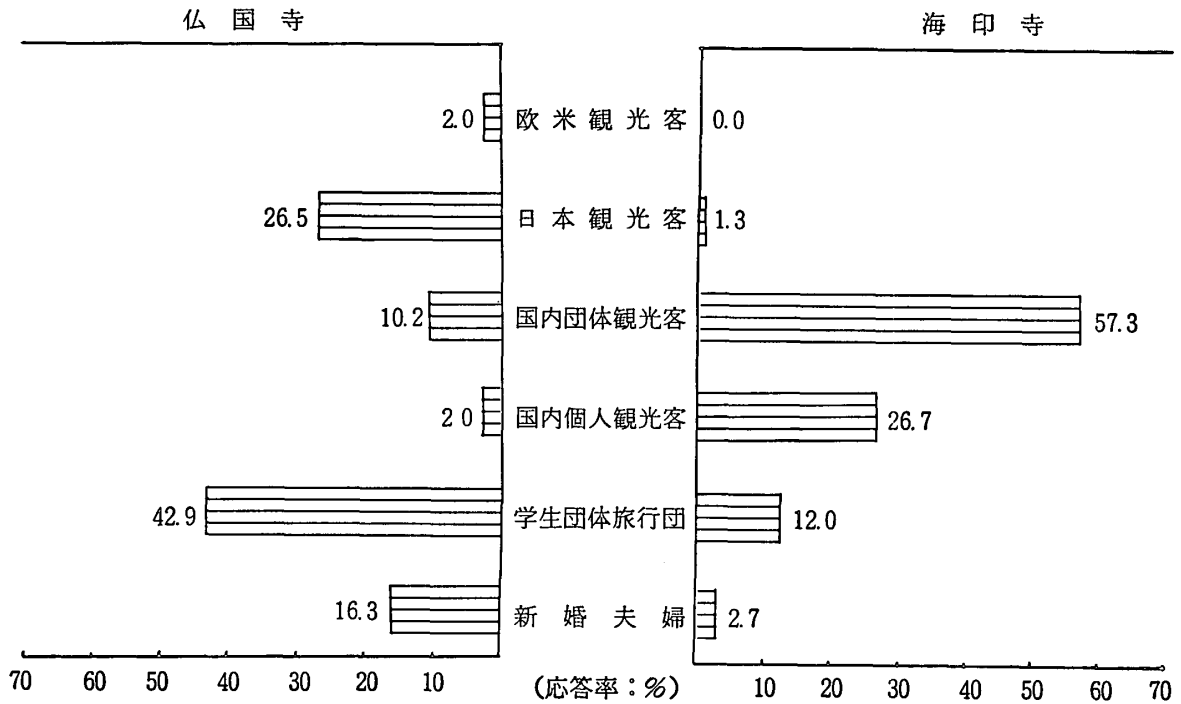
応答者のうち年間所得の60%以上を観光に依存しているものが、仏国寺65%、海印寺73%となっている。二次所得源は、仏国寺が家族の他職兼業であり海印寺が農業となっている(図表6)。これらは、大部分の生計が観光事業に依存していることを示すものであり、その経済的重要性をものがたっている。

(図表7)は、寺院別観光市場の類型別重要度を測定した結果である。実質的に収益をもたらす観光客は、仏国寺地域の場合学生団体43%、日本観光客27%であり、海印寺地域の場合、内国人団体57%、内国人個別27%である。両者は、類型別特色と重要度において相当な差異をしめしている。とくに、学生団体の場合、仏国寺は宿泊施設利用が多いが、海印寺は当日又は周遊型が大多数を占め、地域商店街に対し、実質的な利得を与えていない。

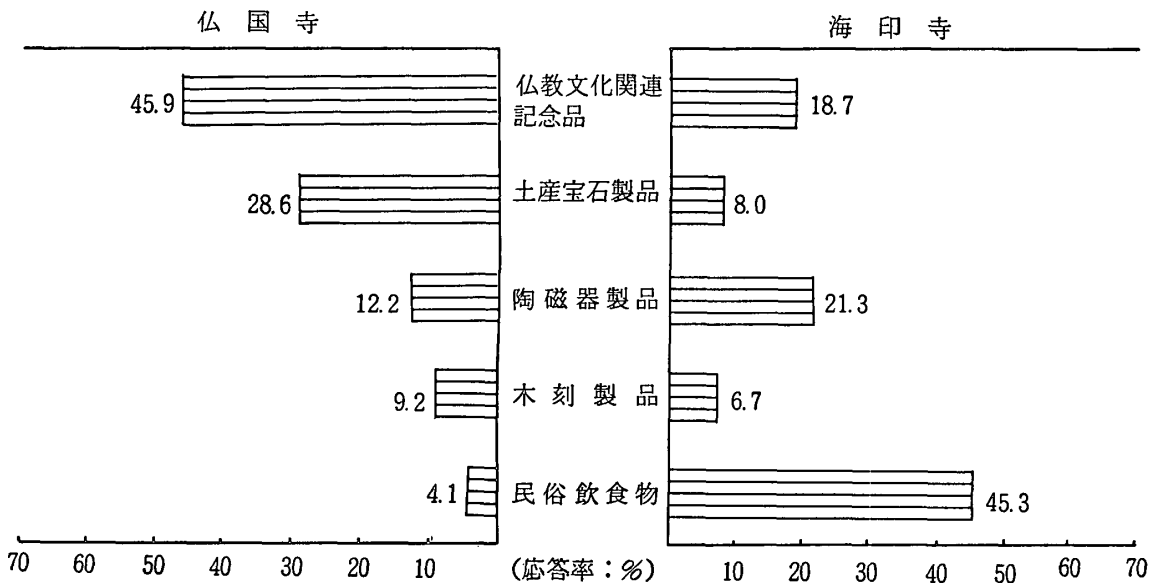
寺院訪問観光客にすすめたい特産物・記念品に対して、仏国寺地域では、46%が仏教文化関連、29%が宝石製品、12%が陶磁器類であり、

12) 韓国観光公社、『光州 住民の観光意識調査』1987, p. 53.

<図表7> 寺院別重要観光客類型



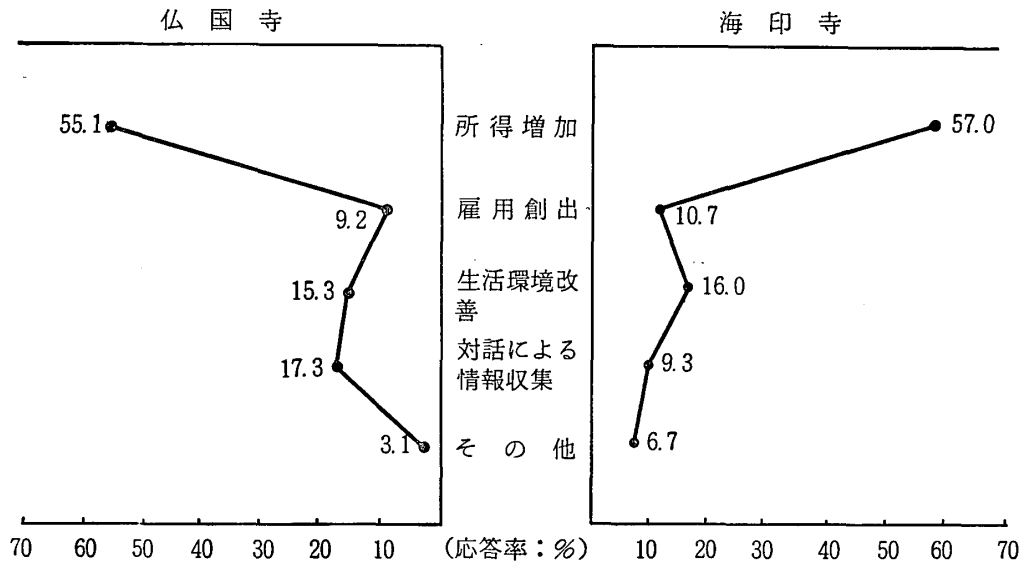
<図表8> 寺院別推薦土産物ならびに記念品



海印寺地域では、45%が茸・山菜を含む特用農産物、21%が陶磁器類、19%が仏教関連記念品の順である（図表8）。これらの現象は、地域生産物と密接な関係があり、地域経済に有益な品目が推薦されている。仏国寺地域では慶州特産品として知られている玉石と陶磁器類が、海印寺地域では伽倻の特産物である高嶺土の磁器

製品と特用農産物が推薦されているのは、それがためである。両者ともに、仏教関連記念品を重視しているのは、この地域において仏教文化が主な観光魅力要因であることをものがたるものであろう。そこで、仏教文化に対する効果的開発と広報ならびに保全が、両地域ともに観光発展の重要な基本要件となるとおもわれる。

＜図表9＞ 観光開発が住民に与える利得



4. 観光開発と地域社会の損益

観光開発により地域民がうける便益について、仏国寺地域では、「経済的に多くの利得を与えている」が55%、「観光客との対話を通じ多くのことを知ることができた」が17%、「環境改善等により生活水準が向上した」が15%であり、海印寺地域では、「経済的に多くの利得を与えている」が57%、「環境改善等により生活水準が向上した」が16%、「雇用創出の効果がある」が11%の順である（図表9）。前者は、経済的・社会・文化的、環境的の順であり、後者は、経済的、環境的、社会・文化的の順である。これにより観光が地域住民に及ぼす肯定的反応を知ることができ、また、両地域の共通点と相違点を知ることができる。

両寺院ともに観光産業が住民の経済に対して、直接にあるいは間接に寄与しているという反応が高い反面、雇用創出の効果が相対的に低いのは、大部分の業所が家族労働ないし低賃銀労働に依存しているためとおもわれる。

韓国観光公社の調査においては、経済的影響について、66%が「所得増加と地域経済発展に効果があった」、55%が「雇用増大に寄与した」という肯定的反応であり¹³⁾、社会・文化的影響について、69%が「外国人に対する理解がよく

なった」、65%が「地域文化財保護に寄与した」という反応であり¹⁴⁾、環境的影響について、84%が「生活環境改善に効果があった」、70%が「周囲環境が向上した」¹⁵⁾という反応を示しているが、これは、両寺院地域反応とよい対照をなしているといえよう。

観光開発が地域に及ぼす悪影響については、仏国寺地域において、32%が「子女教育上よくない」、21%が「物価が高くなる」、14%が「倫理道徳頹廃の傾向がある」の順であり、海印寺地域において、48%が「子女教育上よくない」、21%が「自然環境保護のためよくない」というようにあらわれた（図表10）。

両地域とも、観光客の多過ぎる受入れが、直接的・間接的に子女教育上よくないという反応を示しているが、これらは韓国観光公社の調査結果とも、よい対照をなしている。公社の調査によれば、50%が「青少年の教育環境がわるくなった」、56%が「風紀紊乱」¹⁶⁾、41~53%が「水質・大気汚染」、41~58%が「騒音公害・廃棄物問題」¹⁷⁾、56%が「物価上昇」、50%が「住民の消費性向が高くなった」という反応を示

13) 前掲書, p. 157.

14) 前掲書, p. 211.

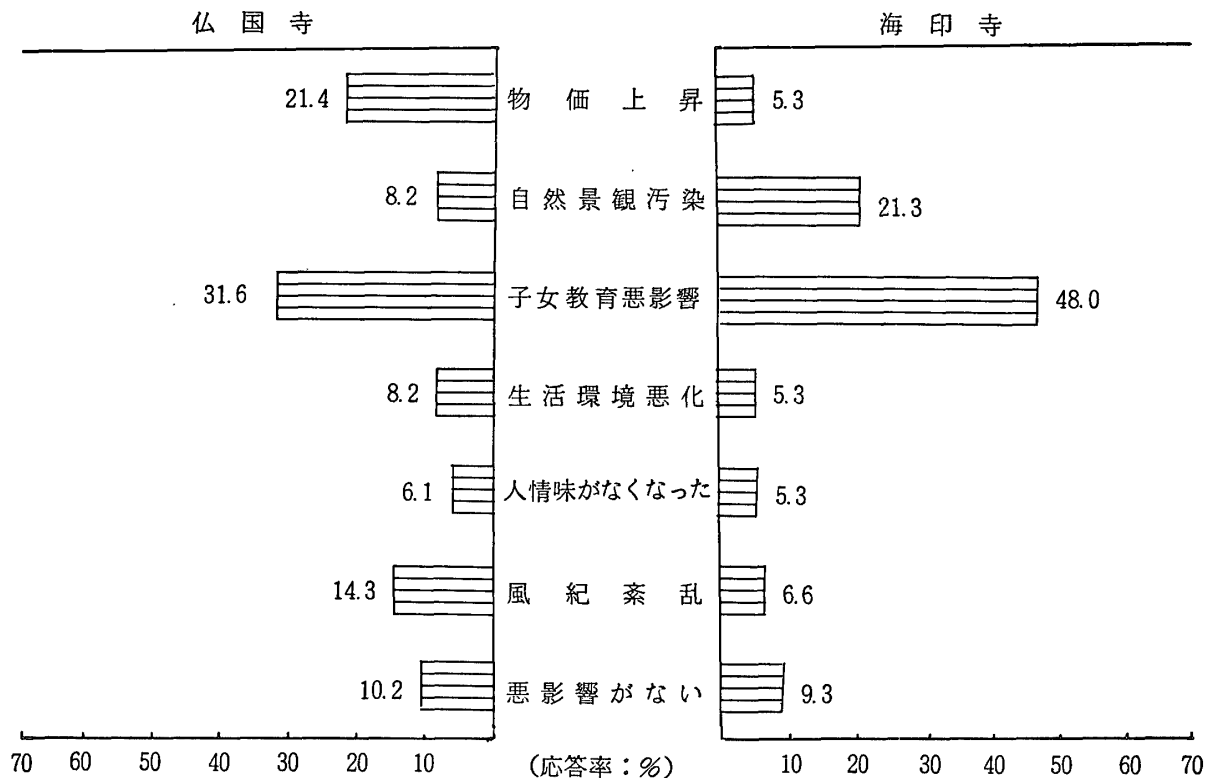
15) 前掲書, p. 279.

16) 前掲書, p. 212.

17) 前掲書, p. 280.

18) 前掲書, p. 158.

<図表10> 観光が地域に及ぼす悪影響



し¹⁰⁾、観光地が共通的にかかえる問題点を指摘している。このように、観光は社会・文化的側面のみならず、環境的側面においても、相互依存的に関連しあいながら悪影響を及ぼしていることが明らかである。したがって、観光客の質の向上とともに地域民と関係当局は否定的要素、即ち、社会原価及び損失の極小化に最善の努力をはらわねばならない。

Ⅳ 観光開発が宗教及び寺院管理に及ぼす影響

観光開発が僧侶の宗教生活と寺院管理に及ぼす影響を分析するため、両寺院僧侶の15%の82名（仏国寺22名、海印寺60名）を無作為抽出し、個別又は小集団面接を10余回にわたり、実施した結果はつぎのとおりである。

両寺院ともに観光客の入場に対しては無関心であったが、観光量に対しては、頗る関心深くそして肯定的な反応を示した。しかし、観光客の行動に対しては、仏国寺が海印寺よりもやや否定的な反応をしめし、その言行に対する注意

がのぞまれた。

両寺院ともに観光客に対する歓迎の態度は消極的であり、観光客の階層については、中産層乃至低所得層を選好する傾向がみられた。これは、その宗教的信心に由来するものと考えられ、その観光客の姿勢に対する期待は相当高い水準にあるものとおもわれる。

地域住民と僧侶との関係は、両寺院ともに頗る友好的であると判断された。同時に、僧侶は寺院の観光客を誘致することにより、地域社会の発展に直接寄与しているという点につき、相当な矜持をもっているようにおもわれた。

観光誘致要因の本質となっている寺院は、その文化・歴史的価値面のみならず、その実質的保全と管理面においても、十分に重要性が強調されるべきであろう。1987年度の入場料収入の使用状況をみるに、仏国寺は、50%が寺院運営費、34%が保全補修費、16%が環境管理費に充当され、海印寺は、60%が寺院運営費、28%が保全補修費、12%が環境管理費に充当されている。寺院運営費において、海印寺が仏国寺より

10%高いのは、1987年よりのことで法宝宗家寺院としての宗教的重要性がみつめられたからである。

しかし、大部分の寺院関係者は、現在の予算編成方法に対し不満をあらわした。この不満は仏国寺が海印寺よりやや高かった。現在の方法は、一応地方行政機関長と住職との共同名義預金（収入の仏国寺50%、海印寺40%）とし、管轄道知事と文化財管理局の承認をえて執行するようになっているが、こういう制度に対する改善を要望している。

寺院地域を観光地に開発することについて、仏国寺は海印寺より消極的であった。また、潜在的資源と魅力の開発についてもやはり仏国寺が海印寺より消極的であった。これらの現象は、仏国寺が海印寺よりも既に開発度が高く、これ以上開発の余地があまりないという認識によるものとおもわれる。

V 要約と結論

国家指定の史蹟及び名勝地であり寺院観光目的地の代表格である、仏国寺と海印寺の施設地域業主と寺院関係者を対象とした、観光供給側面よりの調査分析結果は、つぎのように要約することができる。

1) 業主の現業に対する不満足、動機誘発と意欲の不足ならびに経営技法の未熟等が発見された。海印寺地域は、この傾向がとくに深刻であった。

2) 観光発展の阻害要因として主なものは、仏国寺地域ではタクシーの不親切であり、海印寺ではレージャー施設の不足であった。

3) 観光施設及び業所従業員の、観光客に対する親切が足りなかった。とくに、この傾向は海印寺地域において甚だしかった。

4) 両地域ともに、滞在型観光客と外国人観光客の誘致が足りず、実質的所得増大に難点があった。とくに、海印寺地域は、近隣釜谷温泉開発の影響をうけて、著しい観光客の減少があった。

5) 海印寺地域においては、土地所有権の問題のため商店街業主との間に葛藤があり、これ

が施設物改善阻害の主な要因となっている。

6) 地域住民の観光客に対する歓迎の意識が足りないことが示された。これは、青少年訪問客の無分別な行動にも一部責任があるものとおもわれる。

7) 観光のため、子女の教育環境がわるくなり、物価が上昇し、自然景観が損傷される等の悪影響があり、社会原価を発生していることがしめされた。

8) 観光客の寺院境内における無分別な言行が、宗教的雰囲気をも損なわしめていた。

9) 寺院僧侶の観光客に対する関心が低かった。

10) 仏国寺地域においては、これから観光開発に対する適切な統制が必要であるとみとめられた。

以上の要約により示された実態と問題の改善方策はつぎのようである。

1) 地域内業所の経営難を解決するために寄与しうる、小規模の経営診断乃至諮問機構の設置がのぞましい。

2) 観光関連従事員の質的向上のために、教育の強化と、これに対する法的制度の改善が必要である。

3) 観光産業に対する重要性の広報と、啓蒙活動を積極的に推進し、健全観光の定着と、自然・環境保護に最善をつくすべきである。

4) 観光施設改善のための業種の再投資意欲を鼓舞し、下部構造をふくむ公共施設の向上をはかり、観光商品の多様化と供給の円滑を期し、新たなイメージを高め、滞在型観光客を誘致しなければならない。

5) 業主と寺院関係者とのたえざる対話により、相互利益増進のための細部にわたる計画をたて、これに対する協力体制の強化がのぞましい。

6) 隣接地域住民に対し、観光効果を認識せしめ、その開発に対する関心と参与を誘導し、直接的あるいは間接的な協調をもとめることが必要である。

7) 寺院訪問観光客が、地域青少年の教育環境に悪影響を及ぼさないよう、事前に公知なら

びに広報活動を積極的に展開しなければならない。

8) 寺院境内において、観光客が遵守すべき言行に対する事前教育と、より厳格な指針を示し、宗教的雰囲気を守る事が大切である。

9) 寺院関係者は、境内における観光客の管理に留意し、その流れを効率的ならしむる方策を講じ、訪問客がより価値があり意味のある観光体験をもちうるよう、心がけねばならない。

10) 地域別観光客の管理と混雑な実情を科学的に分析し、その開発に対する支援と統制が効果的に行われるよう留意し、なお、観光収入の分配が現実化され、効果的寺院管理が実現できる制度的改善が緊要である。

観光は両寺院の主な所得源であり、寺院は観光開発の潜在力として全般的に強くあらわれた。観光供給側面よりみた観光商品の構成は、複合的要素の結合体として形成されるので、他製品に比し相互依存度が高いのみならず、またそれだけ破損も生じ易い。これらの特性により、観光地の全体的イメージを創造し浮上せしめることは頗る困難なことである。

両地域は、観光供給と管理面において、大体共通的な現象を示した。そして、自然及び仏教文化中心に開発された観光地が、一般的に当面している問題点を、例外なくかかえていた。

ここに、指摘した問題点と改善・解決方策を業所・住民・寺院関係者、当局が協力して、観光資源の保全と開発の両側面を同時に推進し、地域社会に対する寄与の極大化を目標に、特色ある観光目的地のイメージを創造すべきであろう。

参 考 文 献

1. 伽倻山 国立公園 管理事務所『伽倻山 国立公園 現況』1987。
2. 慶州市『慶州市 観光統計』1987。
3. 交通部・韓国観光公社『韓国観光統計』1980～1988。
4. 交通部・韓国観光公社『観光動向에 관한 年次報告書』1980～1968。
5. 金相武「慶州訪問 外来観光客 実態에 관한 研究」『経営経済』第13輯（啓明大），1980。
6. 金相武，「仏国寺地域 観光事業이 住民에게 미치는 影響」『啓明研究論叢』第3輯，1985。
7. 金相武，「寺刹訪問 観光客 実態 및 比較分析」『経営経済』第22輯，（啓明大），1989。
8. 韓国観光協会，『観協』1980。1～1989。7。
9. 韓国観光公社，『観光地住民의 観光意識調査』1987。
10. 韓国観光公社，『国民 観光의 意識과 動向』1986。
11. 韓国観光公社，『全国民 旅行動態 調査報告書』1984。
12. 韓国観光公社，『韓国観光資源総覧』1985。
13. 韓国観光学会，『観光学研究』7—12号，1983～1988。
14. Archer, B. H., *Demand Forecasting in Tourism*, University of Wales Press, 1976.
15. Baud-Bovy, M. & Lawson, F. R., *Tourism and Recreation Development*, Architectural Press, London, 1977.
16. Burkart, A. J. & Medlik, S., *Tourism: Past, Present and Future*, 2nd edition, Heinemann, London, 1982.
17. Gee, C. Y., *Resort Development and Management*, The Educational Institute of the American Hotel & Motel Association, 1981.
18. Gunn, C. A., *Tourism Planning*, Crane, Russak & Company, Inc., New York, 1979.
19. International Union of Official "Travel Organization", *Domestic Tourism*. Ottawa, 1975.
20. Kaiser, C. Jr. & Helber, L. E., *Tourism Planning and Development*, CBI Publishing Co., Boston, 1978.
21. Kim, S. M., *Needed Changes to Expand Domestic Tourism in Korea*, University of Hawaii, 1978.
22. Kim, S. M., *The Role of Buddhism in the Development of Tourism in Korea*. MSc. Dissertation, University of Surrey, 1983.
23. Kim, S. M., *Selected Readings in Tourism Development*, Nam Young Munwha-sa Publishing Co., Seoul, 1984.
24. Kim, S. M., *A Comparative Study of Pulguk-sa and Haein-sa Temples as Tourist Destinations in Korea*, Ph. D. Dissertation, University of Surrey, 1989.
25. Lawson, F., *Tourism and Recreation Development*. Architectural Press 1977.
26. Lundberg, D. E., *The Tourist Business*, Cahners Publishing Company Inc., 1974.
27. Mathieson, A. & Wall, G., *Tourism: Econo-*

- mic, *Physical and Social Impacts*, Longman, London, 1986.
28. Medlik, R., "International Tourism: Past, Present, Future", *The Tourism Industry 1988 /1989*. The Tourism Society, London, 1988.
29. Middleton, V. T. C., *Marketing in Travel & Tourism*, Heinemann Professional Publishing, 1985.
30. Murphy, P. E., *Tourism: A Community Approach*, Methuen, New York, 1985.
31. "Pacific Area Travel Association", *Pacific Visitors Survey*, California 1967.
32. Papson, S., *Tourism: A Limitless Industry*. The Futurist, 1979.
33. Pearce, D. G., *Tourist Development*, Longman, London, 1981.
34. Sadler, P. G. & Archer, B., "The Economic Impact of Tourism in Developing Countries", *Annals of Tourism Research*, Vol. III, 1975.
35. Smith, V. L., *Host and Guest*, Basil Blackwell, 1978.
36. Wahab, S., *Tourism Management*, Tourism International Press, 1975.
37. Wahab, S. Crampon, L. J. Rothfield, L. M., *Tourism Marketing*, Tourism International Press, 1976.
38. Wanhill, S. R. C., "Methods of Forecasting Demand", *Managerial Economics for Hotel Operation*, edited by R. Kotas, University of Surrey Press, 1980.
39. World Tourism Organization, *Evaluating Tourism Resources*, Madrid, 1980.
40. World Tourism Organization, *Tourism Planning*, Madrid, 1985.

付 録

設 問 紙

(施設業所対象)

この質問紙は「寺院観光地実態比較分析」の学術研究調査の一環として作成されたものです。貴下の誠意ある解答により、よい資料が収集され、よい成果を収めるよう積極的な協調をお願いします。貴下のご健闘を祈ります。
198 年 月 日 (金相式)

次の解答欄に○票又は適切な意見を御記入下

さい。

1. 年令： 才
2. 性別：(1)男 () (2)女 ()
3. 家族数： 名
4. 生活程度：(1)上 () (2)中 ()
(3)下 ()
5. 職業：(1)宿泊業 () (2)食堂業 ()
(3)記念品販売業 () (4)その他：
6. 教育程度：(1)国卒 () (4)大卒 ()
(2)中卒 () (5)その他：
(3)高卒 ()
7. この地域が寺院観光地として開発され近隣の住民にどのような利益をもたらしていますか？
(1) 経済的に多くの利益を与えている。
(2) 雇用を増大する。
(3) 環境改善により生活水準が向上している。
(4) 観光客との対話により多くのことを知ることができてよい。
(5) その他：
8. 貴下が経営する事業又は職業に対しどう
いうふうにお考えですか？
(1) たいへん不満足である。
(2) 満足していない。
(3) 普通である。
(4) 満足している。
(5) たいへん満足している。
(6) その他：
9. 貴下の年間所得のうち、観光事業による収入の比率はどの程度ですか？
(1) 20%程度 () (4) 80%程度 ()
(2) 40%程度 () (5) 100%程度 ()
(3) 60%程度 () (6) その他：
10. この地域に観光客が多く訪れる理由は何
であるかとお考えですか？
(1) 仏教文化の揺籃であるため ()
(2) 寺院内の文化的魅力のため ()
(3) 自然資源が魅力的で景観が美しいため ()
(4) 住民が親切で人情味があるため ()
(5) 空気が清く水がよいため ()

A Comparative Analysis of Buddhist Temple Sites in Terms of Tourism Supply in Korea

—Focused on the Inhabitants in Pulguk-sa
and Haein-sa Temple Sites—

Sang Mu Kim

<Abstract>

The Buddhist temple is symbolic of the tangible Korean Buddhism culture, and is very important as a keystone of tourism resources. In particular, Pulguk-sa and Haein-sa temples in Youngnam region attract the highest number of tourists among the 2,000 temples in Korea. In 1983 a total of 1,747,579 tourists visited the Pulguk-sa temple, while Haein-sa temple attracted 693,709 tourists. Thus, the two temples have attracted 24 percent of the total domestic tourists who made the trip to Buddhist temples and historic relic spots in the year. But in 1987 the two temples attracted a total of 2,680,146 tourists: a 10 percent increase over the past four years. Pulguk-sa is located in the Kyongju National Park, and Haein-sa is in the Mt. Kaya National Park. Both temple sites have been designated officially as Historic and Scenic Sites by the Korean government.

The purpose of this study is to explore the characteristics and unique qualities of Pulguk-sa and Haein-sa temples as tourist destinations so as to compare each element comprising the tourism supply. Accordingly, the socio-cultural, economic and environmental impact of tourism on the two temple sites were examined so as to analyse and compare the significance of tourism in the areas. In this context the evaluation of tourism development of the sites were carried out so that recommendations for the maximization of the socio-cultural, environmental and economic benefits of tourism to the destinations could be made. To extract the various data and information, the written questionnaires for the inhabitants were composed and distributed to all shopowners in both temple sites based on a universal survey methodology. In addition, an interview survey of the monks and field survey research in both temples were conducted to collect supplementary data and information.

The result of analysis can be described as follows:

Tourism is the major income source for most businesses at Pulguk-sa and Haein-sa, and the prevailing view was that the overall potential

of each area for tourism development was good. In this respect the attitudes of the different businesses towards the tourists were somewhat variable, particularly at Haein-sa, and this was indicative of a lack of professionalism. To some extent at Haein-sa, this could be associated with dissatisfaction with the current market situation and the problems the businesses were experiencing with that the temple authorities over land ownership. Without substantial investment by all parties in the tourist infrastructure and superstructure at Haein-sa, it is likely that the situation could get worse. Haein-sa is therefore at a 'crossroads' in its development.

Consequently, there does appear to be conflict of interests between the monks and the visitors. This can only be resolved by the implementation of better visitor management practices within the temple grounds. The temple authorities need to face up to the task of either training the monks or employing professional staff to manage the visitor flows and ensure that the visitors receive a worthwhile and meaningful experience.